砂

朧に霞む月を飲む黒い夜
波頭の白さとあわあわとした音
さらさらと砂の中に消え、吸い込まれてゆく―――

両の掌をそっと擦り合わせ
軽く握ってみる
そこに、かすかに残る―――

追憶を吸い出し
溶かし去ってゆく
波の呼吸

足下に敷きつめられた砂のひとつぶ一粒が
私を理解しているようにさえ思い
目頭が熱くなる

しゃがみこみ
砂を両手で掬い取り
さらさらとこぼす―――そのこころよさ

ああ、心を癒す涙など流さない
悔悛の儀式のような
許しを請う涙など

あまりに遠い昨日(きのう)
たった一日前
それを遥かに遠くしたもの

憎め
忘却を許すな
憎め

懐からふたたび取り出すのだ
あの声を

(2005.11.8)